俳諧一葉集

二

へ 5
4393
2

俳諧一葉集附合之部一

古学庵仏兮
幻窓湖中　編
坎窩久蔵　校

延宝五丁巳春

此梅に牛も初音と鳴つべし　桃青
ましてや蛙人間の作　信章
春雨のかるうしやまさる世の中に　丶
酢味噌まじりの野辺の下萌　青
摺鉢を花染にすりこみを　丶
むかしたうし紀の男ぬりけり　章

勝のひらけそ笑へる芸の月　章
爪たてゝゆくはし曳の山　青
ウ
五すほしあのとこのさる亭の花　章
ひとつれゆくより住よしの松　青
説詠し仕形をおのづから足て　章
友よふとりのうらしひ寄りける　青
辛塗のまるさ白須の棲こゝも　章
桑の下風本業六さうし　青
吉蔔原ふまれて這てのぼりけり　章
法師もまぢにむごうあひぬ　青
恋の秋こにたとくのまくさとよ　章
吉祥天女もられおとの月　青

持つりへみ瑞路のうる山かつら　章
松のはらしみひらく耳たぶ　青
大菩は袋のえ花手からひき　い
かすみ手りきんき天竺のきぬ　章
二
名針の雪貞女一文め瀬をとく　青
風進退をと割ろ井亀る　章
膳の読をよし京通ひまれ暑て　青
うつみあゆりのお辭らうめしの中　章
坡手はうへ石防なとくちうひてし　青
末の松山蕎漬み名　章
千鳥の浦志ゐう万人に賃の隅　青
雲路さひて人くるる　沖　章

たけのこてころふすまめハ六筋の音　青
あら箕山そのく入し陸風呂　章
よいやよしこゑの袋の酒屋舞　青
千里をうけてすゞきのかねくし　章
西の月欠ぬ古手の札の辻　青
ちんま新町しけうさき男　章
二ウ
煩悩のたね張中張まは姿　青
人足あ焼ハ山焼もゆり　章
谷の戸を汲お起して觴流し　青
法名の小阪しらひよの蔵　章
花をとあんとすゑハ子の生けの所　青
上野下屋の片み春こゑを　章

渓国史新に霧ける析果て　青
隠居もさ他出ろうを見え　章
てりかへハやまふれて何はむすさ　青
もしらきに餘男子人数の月　章
大学蟲無学を親子取立て　青
石代の揆ハのかれ弘ハ辰　章
ちも木も三百くりに肥つて庵　青
此山ひとり川隠居料ちと　、
三
不二の嶽ゆかしく雲を剝て深し　章
人穴そのまゝも楠の庭　青
蝙蝠やゝ角の残の赤やものふ　章
山椒つふや故椒あまりしむ　青

小枕やさらしぶしハ引よふしハ　章
基本よりハ女のよみ秀　青
うるひ路の二階ハ初しきりれと　章
かしこまて物名客御み松　青
とうふ耳さ長物の様につくりし　章
独国法師若家のとをし　青
思つけく色は墨染や傍つきむ　章
てるさまちのこ哀ふ眼前の肉　青
飢餓とし弱りそそめる秋の暮　章
多くハ偽言荻の上風　青
三ノ
一葉て柳の姿やちけぬら哥　章
ら経も客おもてなりけむし　青

お食の身ハしまやきのまとめ多き　章
妙高陣し墨染のし浄福禅　青
柳もられ花らてさくらさしちハ諸葛　章
松吹風や凡夫屋まのまる　青
果らそまるみの二本の下紅葉　章
散りし秋の落葉よくなり　青
月すこく草履の乙女孫中納言　章
河内の国くうよふ飛石　青
四季さまえ川原の里も満をく　章
浪平り芦垣結ひより　青
晴れて花入江の浦秋中将り　章
やさしう一流松子り藤中紀　、

名
いてさしハ魔法よまちとも久入よ　青
七りとひく入おのうゑ　章
案獨三井の古寺汲ゆけさ　青
落さきし経しきのこち縦　章
階ぬのう月より八月より　青
傍之竹筆手至合御里　章
既手御みし可ゆうさめひろ　青
白鷺院ハ御手より経て　章
つくしと向手たうう讃山　青
ろけ入鈔座ハ小雅の銅色　章
思ふ萩ハ狐のあるまりよ子しむ　青
ゆ子うう手揚し秋川未の部　章

唐人も多の有ゑうのれかく　青
古文真宝集のつゞる秋　章
十ラ風の多たてけ起て白雲飛　青
て物たふしや人のとまとや　章
新のよそ紀枝の大木大同座　青
弦をひつえさ条の萩より来る　章
拜うて日本の銘々やうけぬふん　青
ゆう紀の玉をつゆぬのれたり　章
花子ゑうと禁の里ハ十圃子　青
夕坂こゆき八峰のさうらひ　章

同年春

梅の風俳諧国にさかむなり　信章
こちとうづれも此時の春　桃青
まやまんす霞のきぬの袖そえて　い
けんやくしらぬ心のどけさ　章
去としこゝに中比の方物をしかます　い
うさやぬの雪けさそけさひき　青
海尽て寒の霄まで月すこし　い
趣向しるくる松の朝霜　章
ウ
いつの手漁翁こゝろゆるむ秋の風　青
寝てに用し時分の羽衣　章
うつ蝉もよし野の山に登りて　青
青嵐ふくひよよぎりふく　章

松杉の木の下の庵家々なれ　青
囊撲桶きよし村雨の空　章
夕陽に牛曳く臑る春の雪　青
見えそのすゝき山の端かゝる花　章
寓宝のむしの蒔絵を捨て　青
桐壺ぞこの木に志るく萌芽　章
瑞の宿夕のりかゝるすみやうへ　青
行五六升こけゝもる月　章
古里のふるての夜の夜ふかさ　青
二
志賀山の春ふいとふく風　い
きゝみや二葉の袖をきえそへ　章
情一つ更涙ふあし原の末　青

ゆく秋や池のうきやる石ひとつ　李
玉子のおやうちくらく流　青
傳受庭のよしすんかまえ吟　李
上總蒔よ毛ハ枚折　青
付ところけぬとひ手房の庭中でも　李
歎鼓分ハのこのれくらしや　青
垂中よ大名ゆれハ町人あり　李
拂ハみとりうけハ取縫　青
古帳よ楼上をを引鈔露　李
火跡をとをし半葉のうき　青
うへのゆみうく晩とりし浪の月　李
酒童子のいけとり秋をせつむ　ゝ

ちそ噺きけハそうきさハ萩の夢　青
地獄のゆかくさしも何うらの　李
藥蔓のハうつらさ見え上り　青
慈手鳶は蓉田の長をし　李
鶏雛とり飛出かきもさの手ふん　青
絶ハたちまち下女ちゆうハ桃　李
売物の情を拾くの湯使手　青
白むくそくで粟五十石　李
田屋る絵よやつりひくたひまく　青
めうり笠ら風も笛の秋風　李
床ハ海鮮人の室の月　青
虎の毛ころもわのれゆく春　ゝ

三
くもらぬは築地の扇ひらきけん　幸
学まなびける秦の法くもり　青
預りしより徐福が似せものと言葉　幸
まけ給ひける乾坤一の分　青
瀬戸の玉金輪際をさすりぬけ　幸
弁才天とく鯰さしくれ　青
二月に経を読みぬ海のそこから　幸
その花の不二も見ゆる山　青
かんなら肩にいたはりくるとなりて　幸
足よし成仏とやらむ免の法　青
雛にも浄府をやらむ都の角　幸
誂への菜豆腐四五丁　青

七

むかし男宗匠くらひの二見をち　幸
人丸の古風さらさらなり　青
大火事を編けるふみに画　幸
すかしこゆる玉手の松山　い
三
日本橋ちんと寸ずて綰なし　青
才々見とゝに仏性の源分　幸
かけつゝみする雲ら拂ふ雲の営　青
語らはふくつき寄らば成り　幸
信千歳芦の花のいふよの中に　青
付さて松たまして見ゆかん　幸
こずゑ柿ともに家まてあれぬ鳴の雪　青
勝ろの玉を焼のへしさゝ　幸

八

物語伊勢白粉とよまれより　素
手枕の秋に癪何施ゆく　亭
かみそりも内侍所まで昨月　素
のりまんれうけしともやうの夢　亭
衣屋を叺に弥勒の花待て　素
かしこの深山を手習の春　、
名
光鶴や万んとうけらる一のすゝ　亭
天下つらぬく虹のつくり　素
その四隅多門ハ行末を授りて　亭
日備の札に悪魔払はる　素
獨さ影欲安全に分りて　亭
甚也ハうみよくしさうる牛の立　素

人とりて見しとんや歌の五器　亭
敷手より行く雲の竹　若　素
いきの松ひらく艾葉の百年しも　亭
菖根の名をも少継手尺より　素
鉢より庭訓今川亭子姿　亭
まてしとみえ二条黄牡丹つ　素
府の有塀をあるはひらきつゝ　亭
後院ハいそし横町の秋　素
す
上きく新蕎麦而しきけれ切るも　亭
大根の情もちうく花々り　素
経夜式本草を讀誦する　亭
南無以ま菩薩来迎の射　素

花は躑躅八重に後からひらく　章
とらり矢二筋まださしの先　青
軍ハ節追手勝ちとなみ合　章
手打の何百ききらし紀の花　青

同季冬　桃青

何にもかや茶の子ハあさは稼け　信章
さらさら川に足の先ひたし　信徳
居合ぬきや何所の玉や新まん　青
掛志名字ハ風ぬ庵原　章
お座の御用も何から八代の並り
御ゆきことまして新ほし八餅　徳

碧海のほとり千月まみえて　青
更くるほどし小便の宿　章
ウ
お耳やよききし話やしき荻の声　徳
難波の芦ハ伊勢の浜よりいち　青
延しきうる話事くずしもなくして　章
からさき小船や神子の保さまし　徳
物像よ理しらぬ香なる　青
千鯨田五投されしきの毛を　章
寺の坊やかまひ御納戸花を　徳
みしらむるら雖く肩つく　青
棘打ちくつかれるをもつの手　章
るり積つき綺續の功ほ　徳

露つきの詩なる秋や光らん
千一休み人をそやの月
花の咲る朱顔をと眺ます夕宮
いつやきつけれ岸の山子や
よし紫川春も香つらし香菜硯
残傍より粉雪多由く
風まく杉枝百千割なれん
岑卯松の紋のまつりまく
双六の菩薩もこちに係蓮花
宿生の跡をすくひとして
月の香に急内金谷の之瀬川
かつ尾流も渕ハゆかりける

書 字 流 書 字 流 書 字 流

小筆図子大地のらしみ蘇服
硯の飯様漏とまりし中
二秋硯れまかしく若こそ
月ハもうしの親仁友とち
蕃学きゆれてひそきうし氏
胸算用のすまきみまうて
猿戻き半の秋硯演風手
香手なるとうち漏の寿雪
阿つ大硯て石硯息飛千多
古川硯氣の茅原ふけり
憶ふれ人をよひうら詠くる
文正りをも是縁なりなん

書 字 流 書 字 流 書 字 流

今ゟも新枕さへくらむ　青
物すさましく浮寸の柳かへしや　亭
御寺ハ晦八幾の二階よ追らみて　池
何をさと白ハ猫の目の露　青
月影や夏の穂頭墨くらん　亭
隠えころもふて戸口宿す　池
清の家ら花ら非在衣て　青
名歌の頃を一ふくりゆく　亭
三
上下の越の寺しふ山う雲　池
百笑石が梅の浮ふあり　青
岩つし棹くの赤帯が佛暁す　亭
守随極の要が攤集　池

掛売も小町ゝ寸へといひさむ　青
らな花よる朽木の枝よ寝さられ　亭
小野阿くし麻黄て八書の月　池
手入をいうもやすらし露　青
伊勢や生れ法まえ山の秋　亭
きる染人ゝてよの葉が色　池
猟帯よ此をさんいやとおり　青
ら絶て雨夜のうち合羽ある　亭
飛のうれしかしさや時く　池
三ノ
森の紅風　狐て八あられす　青
二　松孫太郎と尻しさえ隠れ　亭
三　笠の山を引のりて　池

萬代の古き寶くと呼ふなり　青
覚みやされの夏の羽衣　幸
囲ゐの蘭流くちらそさく夏花実　洸
不二や尾さ隔つ江戸の弱舟　青
恐ハ海入日を波ふうしろ寂　幸
松の根まくら石の縁とる　洸
清さとや化女の形を逃さま　青
尾張の煙りて伴の月　幸
秋立を嵐の日わし初よの秋　洸
流されみよる寒きうの雁　青
衣裳絵の姿うつのす花の風　幸
身ひきの入る朝さ白蔵　洸

名
絵の書一巻二百美くれて　青
氏は称ハさいふめてハ真久山　幸
老合のたまり宮千歳をし　洸
幽霊と業さ浮婆のふぬすみ　青
業縁をの橋の上より落きて　幸
乾く合せ初ね雨も生み日　洸
祖父祖母なやおとや若くとも　青
鼓をいうしか子雑よせんとく　幸
米俵くを絵て扇子かけ　洸
木綿の夕風弥三郎　青
韋駄天も志けし体ふ孫郷　幸
身をやむきとなる川舟　洸

もしやこれ追手鳥ある彼の月　青
すハ諸人も芦の穂の声　章
物の號振舞するぞ律師　徳
木隠子の尾上の端の雪　青
人形の獄の一ハよりけりかし　章
さとけ手かへる花居浄き　徳
此箱茶盈とする身七度ゆそ　青
行よし言白跡こしの法　章
流浪深かふぬ花の色こそ　徳
御代以来おもむ入の春　執筆

延宝六戊午年春

さぞな都浄瑠璃小哥ハ爰の花　信章
うすみとりに花か人形　信徳
青以田吹山より春見えて　桃青
かはらけの瀧の気ハのむほとく　章
あらうき嵐に浪の跡舟　徳
たよりまちば旅友ぞち　青
已るハさひしき庵に手をなれる　章
松を譲り札金の秋　徳
ウ
手うけものの家の中にそ覚えり　青
思ひのま川に流るるしるべ　章
木隠ら里ゆうの草の果てなる小　徳
門ほとしとたゝくまむし　青

篠田屋進退ならぬをたのまれて　幸
二人ゟ若衆浪人小姓　浪
作事すらちぎれまうともけ見足　青
待うけやつけ跳ぬの毎夜　幸
心をあはさぬの浮く宴を八　浪
浪せき入る大釜の洞　青
岩流坊地獄の底くさらけ出す　幸
強き扶解の初そ辟くも　浪
湖の月清まる寺の浮擬苔　青
陽の内綾なる宴の香　幸
有を取綿ふさうする花芒　浪
咲きたる八毎年村まり　青

猫の尻入江の砂子寄を付く　幸
のぼり魚にしも鴨の吹かれ　浪
山うけて精進落を秋の寺　青
三十三年叔たてる浪　幸
蚊帳や後威侍のあらうけて　浪
守護清河小僧新貴寂　青
いろは顔桂主山をあらうへ　幸
むらさを増猫て竹る峰秋　浪
新ひらり花月清の寺根ちの　青
琳の宴めあもしの給一枚　幸
賀舞よくもうとうるる時や　浪
まよひ子は母泥めけまう　青

二ノ

侍きそ人しいのちとゞめしに　宰
悪鬼と成て姿ハ千ま　沾
西之方流れよるものかゝり　青
くしに笹まち枝をとゞとく　宰
おハや東叡山の大庭き　沾
花のさかりに所井をよふ　青
青柳の姿ゆかしやれ　宰
衣裳手もつ物陳くらはす　沾
来まふしたが眼まふへの娃婦　青
老童ヶ弱子南の夕く雄　宰
庵の古手香れ隠しておまけ　沾
浮生下便風の玉章　青

三

心中よ山林竹木格きるてと　宰
未来の底居菩提和の月　沾
十才の和尚の手ハ筆秋ふけて　青
孫琥ハ一のつさと清やまゐ寄　宰
童のいと袒座の店の風楽し　沾
そのほよのよる顔籠のふみ　青
老の渕まて物ほし人あはり　宰
首ふけの思ひ性てよし　沾
うき中ハ一六進をられて弱しと　青
家しの草手霜汗のつて　宰
老ふいお大荒宕の書おもれまて　沾
鞍馬ゟ僧正床入の山　青

若衆きかり流行して八幡太郎　亭
かつらすゝしや右近ぶりまん　浪
晋の月橘の精の入りて　青
すさまし山も慈悲魔佛　亭
三ノ
天性の眼の光る陽の跡　浪
餓鬼の笑ふ因果すふそら　青
恵みやさぬ夜寒もあの里の雨　亭
志きつるをとして十貫目丈こ　浪
大八や志のひ来の恩ふりん　青
日傭とめしてみ付の伯　亭
山住の柿樺子尾かけ　浪
青簾の月白羽折て行く　青

爪先子未室のしみやちゝのまゝん　亭
よそを捜しする谷深き肉　浪
山高く漁舟端る名の寺し　青
湖の夕まぐれ柳の影る　亭
白雨へし花の霊の信濃なる　浪
曉院やつ鶴いふ乏　青
名
熊坂も此旨なきみ引きて　亭
山まさ山や三条の九郎今　浪
再手取亀寒くやきへてまり　青
松風淋く漂ひをとく　亭
古梅の庵の芭蕉葉三六反　浪
楚辺のかきそへし積街の秋　青

邯鄲の里の新花月ゆかさ　幸
よくしゃくハ会ふほと流る　沾
子包よう十万億も鼻の先　素
京からきんの出す武菩薩　幸
音楽の小弓三味線あいの山　沾
四竹さハく佛の教へ給　素
姉添て御伽は丘尼の注でも　幸
住家をやうとの佛まゝ有ます　沾
すゆつきし黄金の膚こそやうず　素
小鯨みるふの革袋ほり　幸
枯枕浦くさうやきう始らん　沾
鰯く仮のちきりり燒て　素

たちのゆきうけくし汁のうちす情　幸
恵理の箸紙のよしを拈く　沾
実や花白来て上焼菜手　素
石ちく帰りる朝幕の石　桃筆

同年春

独の人も増や古郷の八ののほり　信徳
徘く出る百姓里の春　桃青
峰より霞うみの草鞋貂袖く　信章
ふ人力の東風もとるし　沾
熊つのひもこくハ方のうすくすう　素
あ衣を咲ふ袖うりの衣　幸

星の数萩の下葉のうつろひて　沾
尾花か袖の霧かゝりける　青
ウ
鈴ちんしいつもの風の吹　李
丈八山伏海士はよひ寄　沾
一念の鱏と成て七まとひ　青
かまちハ児の尖師いましく　李
鼓ふの手作病の海より上つらう　沾
鉢のいつの木をとえし　檀紙やう　青
鏡もしこ枝の髪やかつらん　李
流石それすちんたけ竹の　沾
骨うつき鬼ハ笠まし乞のくし　青
立雲よう人の撰ての家　李

夕月は少風ある流れの月　沾
木陰さしくさの紅葉ちらしく　青
花千鳥河ちらんをはうめて　李
綱手つてのえし雲をそれゆく　沾
二
了簡何借金すさ済まり　青
勘当ゆるす二月中旬　李
釈迦涅槃式護すのみくらん　沾
八方待雪禅吉日取さまう　青
鉄張や十方世界のうれ取る　李
凡いのちハ春去の霧　沾
いかし土地蔵るみ志の秋　青
うはなぬけし枝ゆく月　李

詞とめくらに語れとくる嶋の言
東坡か小まめの外の一むら
廿里くる石すりの文のよしいふり
雛子の源木残魚のさかつきかく
去用意され山そ甜蜜の青ゆるし
公らもならえく萬那のすとし
二 笑風若衾相淵に投桜かな
吹矢をしおて墨汁有
秋のしぐれ源の業成きをやうねそ
ま川虫鈴むし曹ならへく
恵草を莲て竟しまてのれて
千葉平に情人やなふ

述 青 宰 述 青 宰 述 青 宰

本銭色は物石貸くすて豆好
のんきなく神弁社尺うきる
出やうまし安宮嶽のてる口さ
松江の御み表店よ嗅
めり桶に饅のてらをつみかけて
平月白うらむくの足朝
花まうらん武のおれ袴りもの
父大臣の室つかはま
手花をや十二ひとくめうはま哉
三 笈の中より走山の月
小男鹿の妻をこしれ乳府の手乳
名儀の松船むましゆすは秋

述 青 宰 述 ゝ 宰 述 青 宰 述 青 宰

関所の掃に寄せる字み寄 仙
火付の筈とし從めらん 青
本三絃縁も張るてくまで 宰
貢の菊や鮎おこし茶る 仙
かさく買手難波の梅は兄弟 青
覺えし笑 紗衣の裏 宰
子從のよし陶の市翁そめ字 仙
湿鈍きり淺き橋の石水 青
隅もの手井の宮紀保子引きり 宰
気のやうらくさ柳ぶり来るり 仙
三 買うて走り從ぬ深気を付の嘆き 青
以川の大寄せ 以つの佛一堂 宰

約法奈の三五振つ雪あ土戸五つ振の 仙
地獄やふりや其作破りや 青
小楯めな段の枝みたまむまき 宰
滅金よき影振う浪花王 仙
手足振木で作りまする神姿 青
若戸ひらけて鏡臣の兄せ 宰
諸の文字一分も呼まき定り 仙
擬よかなる古在の月 青
秋や常ぶし二代目の埒飛むまる 宰
よるひ般若踊り玉露 仙
花の枝読み銭きり取る 青
月しめる歳人冬甘草 宰

名

素読等をひきまとうす聲納　述
牧るハこけて足をひょろつく　素
良志は下女としの銭ひ付　宰
赤前られの旗をふひらす　述
酒桶に引等の一句志ゐされて　素
倩以ハ人を突くらら　宰
貴こえ人を身破れて宿も新し　述
思ひ寄経るま来ぬ秋数播　素
果こし爪の先なと出ぬす　宰
志のふてられまくる点とう　述
恋弱し内親王に消てを染　素
乳母さくゆしハ星のかの揃　宰

疱瘡の神思神なく宿の月　述
ましてや雨れ張良の勢　素
扇等布の衣器をひくのくし　宰
松をいく代の青柾左右つ　述
小僧の衣を嵐に出めれハ　素
それこら枝を洗して一寸ふて雲　宰
火雷けらを諸々ひらく無　述
昔厩おもて本所の素　素
江戸の東ふ近頃以来の明とうや　宰
後り白るとも神とろう男束　執筆

同年秋

於四友亭興行

須广ぞ秋志賀奈良伏見でも是ハ　似春

ちりのしの海さしてさて月　四友

沖の石玉屋が袖の露それて　桃青

見きしられてや戸の留しむ　ゝ

山おろし小紫のあげはさんと以　春

志らぬ恋ころもさきのめくひ　ゝ

誹諧霞庵てかしつうて桜さく　青

ウ禁もそ蓑みてつらめゆく　ゝ

めす人を三笠の茸や啄ふらん　春

火付の跡もよしくらきかり　青

学難の風公儀より烈しくて　春

陽宵うつれ白髪の鉢　青

峯駁巾霰まむさえぶるや　春

洲崎の松みひらう狂言　青

てうちし吉祥の部みえ春を思ふ　春

涎の象牙　撥のよふかつむ　青

又や来る風屋門前み花物もし山　青

南朝四百八十国　米　春

芳野山こまれうる武士の世なるらん　青

浪こす岩をきつてのこる事の　春

花の嵐有の夜嵐狩の鎧　青

吉柳ちるあり女房ゆかれつる　青

二血の氣多らしみ幾らの去の庵　春

胸のうかりてさのみ萩 藤袴　東
弥めしを中川百里にかよふ季題八　素
時雨の松も引さとよふ　東
お取済てきひまへりし芋らつ　素
宿老の月ハいよ〳〵しくきれり　東
棧元やふんどし汚て秋の風　素
芦の丸取てうつきゆりかり　東
海よるゝ本れて浪の神と　素
さしむの縁て結ひ矢のしやく　東
甲斐や松や次弥の枝藤に分入ハ　素
日上人に親てしけあり　東
尾根の大もらぬ霧に小袖史て　素

二ノ
弥代の嵐またう鷲く　東
めゝれハ萩原上のて静けや　素
見てや篠のめるの芒霊　東
お使ていとも秋の果来む　素
二百にさすく文字の家　東
命の月ゆうてや新をちむすふん　素
昨日より家の合戦後のし　東
ちやうらきまの屋をえしきかて　素
了川ち小袖に男ありけり　東
冷食を思一口て喰てゐり　素
是生滅法生滅法　東
煩悩の寄をさかして棚さらし　素

寒むすやおよふ芒ハ蟷螂て　東
口惜の花は散りやめく左卯　素
ふゝまてゝ郭公けふる山吹　、
三 ひよんな忠宗也のうてや帰雁　東
あさ人くまし尓道頓の雨　素
お情ア滝川の浮世の本哥くとそ　東
根あしらつらみうてる浪人　素
去数の雲より雲お狩んとハ　東
茶ちうのひ手風宗るまく　素
歳月の中松のたつや隠まらん　東
とくつとも岩根お下女ハこそくれ　素
残情あ波きのれをたてぬのこと　東

以うろ子情そと投てゝみよる　素
憂衣猪の袂手よしおうて　東
衣うら引うれく星のうちは錦　素
たとしくと天の戸渡ての曇の月　東
三 三弥を丞へ杦さ手し秋　素
聡の上田ホ流る龍田川　東
山もて時雨く末の梢木の葉　東
涙雲の山ふるまもふ隠里　東
多く錦そと塗らく他境入　素
乞を桃灯挑や長ぬるしん　東
暮の世や子あまく杖くし草履と　素
老手たら鉄武法の乳お門あるく　東

衣きて肩にうしろ仕合　喜
酒手も白雲帯を解きたり　喜
秋風起てもらよけ棒　喜
筆遠くを月のさへぎる八景に　喜
尾を引すりて森の下草　喜
御神鏡剣花ハ散りぬ　喜
つくしさしもの手まくら流れけり　喜
捨ける二つの玉子かいなき　一　喜
うちやうき座ふ香のかぐくと　喜
白浪に伊与の湯桁をお渡し　喜
ふみ居る中ハ十六　喜
山伏の硯にむかひ筆とりて　喜

つるや宝の池といてや此母に　喜
物おもふ声の西の方うりて　喜
菜の浮れ吉をはなれきり　喜
古閑の下諸一足や踊りもん　喜
ともし火やうても隣りはりきり　喜
秋の宿覚火入をさけるものハ　喜
椿筆の袖に月をおする　喜
思ひの浮れ恋の妻戸をつぶ偶し　喜
喧嘩眼をくるくまわれ　喜
落情のまうけしき君のもの　丶
黒きのすえるのかくろうすハし　喜
追剥の浮き裳めけさ裁ちり　喜

蟷螂蛙柳や咲出つくしむ　春
千手の前葉膝ニ抑へきく　青
折ふし松ニ衣の花はく　い
よし金の花郭公まつの花　春
山もうすみの庵て歌をめ　挽竿

同季秋

尺延をハ流れハ尺延ハ延ての秋　桃青
桂の帆たしら十分の月　四友
さゆつ太子みをえすら扇て　似春
山ハ濡す峯よもよ何り　い
恵原し見て家まぼきと人やしる　青

うけさかりしの悟大将　い
偽ちまて御鰍魚膾箭のくし　青
寄ハさえけ升峰寺ましく　い
ウ
鐘そはうれ神もしるお衆ミそし以　青
神も続さたし松ゆり菊見　い
金沢子者拂ふも千代の秋　青
みのしれもるお庭市の月　い
木賊苅山ハしろうて去　青
鴻ら秋ハ木萱の麻衣　い
巣を基る何をとらみく鳴鳥　青
雲尺ハよそて吹森の本のりし　い
杉談を千候の松の大たくし　青

長老のこゝろ見えてものしり法　素
供養するあれの暮やひと〳〵あそ　素
霜ものゝ下くさを篩まうすく　素
花のまへを嵐山よりけ待く　素
宗匠のこゝろよりもふいり　素
二
白妙の旗手まとへて踊る雪　素
ふじを軒端にかやめぐく流　素
寺の中にし定家為行住こさん　素
飛こゝに様のまゆみ　月　素
八百手妙の光るなへて　素
狸のこ川ちかしめぐ本寺の秋　素
粮や香み衣千来る　素

騒(カハズ)等く信正り　谷　素
一字半字踏し太刀の紙　素
雲とぬく波の瀬を掃　素
さらさや寸切まて花たる　素
翠の似せて手やらふ竹の一村　素
話を抜く隅し経等の　素
みの纏り絢の大ろ結ぼしく　素
二
ことさらく来る長精わしやしれ　素
いさまさ人をとら雲物もあし　素
踏の数まふ盛群をも読みて　素
蹶(ケヤ)哉(カナ)蹴(ケル)こ又とらし　素
おもくゝかるさハ静ひの花とまど　素

款仁兵衛清次ハきくほと
茶小紋の羽折ハ美しき海のとし
清よきし札紺の夕映山寺入
背路を木隠の所やすらふ寺
駕籠ハ何れも毛虫をおそく八
紙の骨いくくも消し黒の月
又なけりさし丸山の色
仮葬郵わの東花ちてて
うすみの方より招くおやしさ
三 立まや金掛付くよつ内手
投げ行御家きて姫しく
清供きえなくさもの小庭原

浅く兵 鈴大根
世の中名をとうけんもわかあけ移し
茶ろうハ未来お安およろぶ出
因果ハ天秤の無をしまくらん
善男善女説をまはし
又なりて孔子字ハ太二郎
みそ酒その八茂すお髪
不心中安平ましりて何みもん
君が唯箱糸右て川たし
声のふ萩ハ取まりつる空の月
秋を通さぬ中小屋口
三十一 寂滅の貝ふかえてる初嵐

石川めぐる山本の雪　喜
大地震つゞく龍やのぼるらむ　喜
長十丈に餘るなり　喜
加州侯の勝板きくえましくて　喜
魚外濃もよう気色丁　喜
ぬれ鷺や小手かれハ手鑑に　喜
新橋こぼれて財布紛きん　喜
古氣ゝ伊勢の山料安く穴　喜
河内ハ東よりとゝ此秋風　喜
まゝれてそ鉄鉉にはまる神の寄　喜
良きて漏らさ絢この十九月　喜
待宵のさす姿息花とぶし　喜

喜　半より両瓜ハし　名
新花に隅気のまゝすわ　喜
代八車沙幸めつゝし　喜
伺さするぼのうら三郎大訓　喜
たいけ狂にもよし耳に　喜
口香まそ告擬析く像なり　喜
うまのゑ紀より赤以まんとし　喜
並糸つるくや京への伊達ん　喜
菓子割え枝て　のむ　喜
広手稽の菜數あまなる　喜
職部横ある秦に回話　喜
拝一つ等民うれをし賞翫す　喜

けんどむ菖蒲やとの端は雲　青
小半の雲手酒つ月も白　素
居平沈む猟草の露　青
露風も山雀籠にかくれつ　素
かゝる〳〵は天下おやすき　〃
浪八多柳も人形浪風も　青
海士の業しハ祈のてくに　〃
所れし噺花火にかゝりて秋の夜の　素
八重皇膚のこれも雲　〃
面影は枕ろし大根花たてぞ　青
あつる娘子手まね秋の月　素

同亭秋　春澄
のまれうり朝の大帝江戸の秋　似春
詣の加くをも金は月　桃青
菊やとの家くるゝき阿弥陀て　澄
海舟は樵ハ汀浪こす　素
雁の声しいそのし枕の床　青
与作はや吉川そ仙境に入　澄
まかり来も雲の上まて紫は　素
いつも神ある　青
御断うそもお没ハし　澄
掛しとの作造後多はるけ　青
むかし川ときさつての雲はそひかて　素

静かにしたひ人比翼のうしろ秋　青
木仏しゝ仏行堂内の降り出す　沙
鼓の二つまくろて寺も見え桂此　素
小笠原を東大勢神のしを思ひ　青
鬼こしくさとも生猫よりて　沙
天も花に妻の錦粧なりぬ歌　素
二
飯の己てふ此寺にあかゆく　青
声も霞む猫八郡て砂しき寺し　沙
逸つくの二いに峯八もまるかん　素
秋の声も見よし葺此さなれてそ　青
金輪陰より高山の寄　沙
毘沙門此錦の末にも見もの秋　素

かえ此首の夜あり月　青
蒼きるハウ手やさけぬらん　沙
去摩文手書のれし手　素
菓物右近り歌を進しても　青
吉川の人手ぶりを尺ましや　沙
気乞手バウ此二けんの松並し　素
日待手来さる山作りさきし　青
二
やすまえ秋も高田めて国覚すあぢやすき　素
きこの山川とて身の時ほ焼みえ　沙
内通に青此なやかまらん　青
松ハすゝ見る入花末冬　沙
見ハ流抛ハ錦の長緒きて　青

凪そりハきむくしらいすすの部　圭

同　似春

まく菜より花菜分の旅をきるつ　春沈

野を越して八幡の寺山　桃青

都杖手折て月の影消す　圭

乗る駕ハ肩を衣うつ音あり　沈

気ちらくして木この実秋の風　圭

天下一件目録を千年の秋　沈

流るる雨も読めの一句けふ天のかや　圭

やよ都しう天帝のさくし　沈

笑へる此不変不易しくよ君山照坐下　書

鉢るすのとくくハ古きみえ　圭

きハ根手わすの裸で候　沈

魚風その宿ハ読書の書　書

生女み玉依姫ハうれしとも　圭

神代もきこの十百文の恋　沈

霊窓の枕草子をふしねみ　書

李加の帷の前さまき　圭

寝よ中比僧者一人の有沈で　書

二或ハ鹿年無理の秋　沈

状栄の花をうすれさう取の声　圭

とうし所々十方れ萩　沈

子う網の麻も髪と生むさ　書

小町ゝ果は女方とも　　春
悲所詞ふきんなつるも指さす　　澄
告子恋の色てに論やしは　　青
あら結縁ならしき舟を思へて　　春
秋の庵子旅了きひき　　澄
針立は宗匠傳授見まくれて　　青
秋もてぬ縫ハ酒山は月　　春
所々粉粧きのふハ峰の前紅葉　　澄
四五丈ほとり客しらぬん　　青
二オ
又冬のけ光ハちよくにのよふもさ　　春
境のつ浣ふ沖津きつ波　　澄
竹戸柄所波の門やゆめぶん　　青

漏きりしとまゆし噺の梟　　春
山ひとつ川ぶの松おろしもすそ　　青
耳せくかく寸岸の声秋　　澄

同　　　桃青
　　　　春澄
　　　　似春

塩かしてもいさよふてん影ゟ　　青
出てのほる波のあちち野　　澄
川流の杭木や龍のつらふつむ　　春
千季子ある芸みとろうし　　青
又とりてのあるらをと岩根の月　　澄
ウ
雲う吹かす山お秋風　　春
ふりすこみの兄しやすくやうち露しれて　　青

納なし　雪あさ〱
浦島や桜ゝ咲けて悔むらん
嵐にはゆくる湖の夕浪
於小舟米俵の浜さひ寄り
蕉も籬も春の芳生ゆり
人あられハおそこし女ハ貧報郎
大阪くしいはしくて客
二十の有今の刈らをふりて
ばくちてあうし小男兼の角
数芝袖めれてや袖の雨のもひ
左にまを奇しして雲
二
麦飯の丼やならて露むらん

野なるのしどろく今の古
幽谷ハ残漁舟つらしのひむ
さの待かえひよる浮芋の浪
秋さらの金龍山や見てつむ
聖天高くけもうけるなん
帳面の志気を浦あけつきて
春のうらて重ハ石川るなへ
まのなひをすいさのた郎れいなん
既千不帯も平やなばるく
将の月様町さして菱あふ
作なをお子忘らしつ
二ノ
吉男の(?)すあれ秋文て

浮　書　寿　浮　書　寿　浮　書　寿

浮　書　寿　浮　書　寿　浮　書　寿

鶉の床をまくらにしけり　似

庭かすみてしかばやおもはん　素

きさらきのすゑや天のかく山　素

伏見姫のよめり行にもさそはく　似

古巣をうつる仲人の鳥　素

同　桃青

宿や月百日千金の通り町　二葉子

夏を數しらぬ看板の雪　紀子

新蕎麦や三嶋かられて田舎うどん　卜尺

芦の葉にゆられし猿尾の浪　二葉子

墨染の柄あし小舟こそこそ　桃青

其男ありと尋ねそこの姫　桃青

余所のを光悦流とのされけり　卜尺

菜草喩ふくまりこしらへ　紀子

言論の保蔵を裝て　桃青

為をもとの手緑青の山　二葉子

浪よりの峰より月の霧うつり　紀子

秋を常布此庵の山風　卜尺

積るみ鶉帰り乃ぬまくされ　二葉子

精をかけ此三位入道　桃青

かくと有くひける手もとのいに　卜尺

又厚をも娃子ありなく　紀子

笑は付ら金のもとかうふん　桃青

訪田のかくれ将棋ろうしさく　二葉子
二 毛氈を染川の岡まれ錦あると　紀子
てよや霞裳羅漢業する　卜尺
彼れ紫染衣雲のかすみ波吹ちよ　二葉子
箱ㇾ手羽ら郭公とぶ　桃青
押入や庭の夕くれ宗鑑子　卜尺
織もの地物衣笠の森　紀子
能太夫まてぬ嵐の松見えて　二葉子
扇様ちくゆくゆかし鉢　桃青
旅部と雲根の雪のミちやまのひ　紀子
俎板の月擂鉢の不二　卜尺
昔の秋三千余人の掃物　二葉子

二ノ 釋迦もこのよを気倍の付　桃青
板片て精会の豆をつりひ将　卜尺
大坂ミ川も尾のこ続る　紀子
新町の火入とうやい是とうや　桃青
鬼一口て伽羅を喰割　二葉子
花の時手方と川し若衆こ　紀子
蒸れゑをまの王代のきれ　卜尺

同七色求る　桃青
こけれ芋慈菓子つまん言の言　千春
荒蘇味噌こし岸綿子雲
濱風の碁盤将棋箱済て　信徳

縁に花衣おもてかけて　素
嵐とうら花まち月の入るや　素
残暑けしきは静修し　淡
ウ何と結ぶや一女ト枕の初尾也　素
百ゐなうきったちふれの秋　素
侘しおもかるきの釋迦の説法し八　淡
咲すひハてんち十六羅漢　素
又男ら姿かくちらハかくされと　素
古ハ羽れ千老そしらて　淡
つくしと汜令のやゝを六禄さま五　素
錦のくとかぬきんきよの霧　素
鎖かさえ九て出すら音の月　淡

雲井ま花る有の細首　素
料理人腕をたて花の浪　素
木曽殿の扇汁の素風　淡
二住吉の汐干千尺ぬ小刀紙　素
須磨の姫松挿ものをとく　素
来てくしに孫猿も神も狭うつ　淡
枕弟くし紙めけの実　素
論そつき天の深さし中継て　淡
経の白お千鎌きうし為ふ　素
滑川ひる艾千火をとほし　素
都ら家より羽ハ第の風　素
いそしきそら利久とひ法師隠　淡

紗綾京の三郎よし秀の月　素

虫のあはつゆ一夏する荷薫し　述

いさこ去して石槨の露　其

みんよれもて戌时をいそひ琴　素

国生の末葉あらす四竹　述

到さやさし乞食の妹背をよ娡　其

こゝひけ侍てこすのきぬし　素

思ひ川垢離も七々の鉛霞　其

南望や稲荷の瀧つきの素　述

同　手春

芳想

さけぶ二月廿日和霧ヶ　桃青

天下の物のけ聞かまて素　枳風

面影古家ひとつく打さけて　似風

志らむ嵐子ゑ々る翁ゆく　氣

寒ゆすり永以鳥打ほのしと　幽竹

谷の戸口にすう志れ看板　枝風

上々吉々のむかし吹降らし　石巳

千里の翔も金ゆ梁の秋　執筆

同

ともつくや夏露下前く芦の葉　桃青

山をまもりくし極のいぶ露　枳風

手の顔なる廣袖肩まくりて　風
こゑのさゝくし風のうつる枝　青
何ゆあみ餅子なるのむら雲の出　い
猿子をたけて峰の松たち　風
朝まのけ岩根の床みさき兜風　い
あけ川添をうつの手すまのしま浪　青
ウ
菜御さらむ袖より待ちに風さえて　風
何とも杯など惠の河け初の　青
五千点あるやさも隆くさし　風
ひとむらなるを絶織に有覺　青
随篇にうみんてよろしき流の泉　風
青胡何くしおれ松よ姫君　青

小松か由見えきのひろ原かけ　風
ともゑの河のうしきめくしの末　青
風自ら小倉葛千浪こして　風
原咲粉る花みなつゆ　青
良金の秋や彼千鷹らん　風
あくまても春む山のたみ月　青
名山の舞を鳴好に寄る花の浪　風
二
霞もさそうにうつるかき河　い
はしき板の彼千末社々みな法　青
嵐の絶えぬ方ありうり　風
朱儀なりへうすくすまつ夜　青
四十うみに出芸かれ　ゆき　風

通り務をすてしとも鳴のそ　青
華緒のつまりよふ手ぬしの　風
親父殿さし法鉄八町ころそ　青
きれたハ夏とけ彼岸ころ出　風
秋風や赤ボ豊後蝶尾原　青
芋虎きりし禁の下露　風
此月子筆標の日もものとえ　青
涼ハこころ経て秋つりやとる　風
垂鉢ハ角まつも河へ寸まよる　青
二 四里のほりくる寝の岩角　ゝ
大股をハ雲ハ丈のれて雲の峰　風
松のふ之子下帯も郎し　青

まさ柳のし張もち波のそ安貝　風
灘お塩屋の糧箱の底　青
破れ舟削ぶりはく花見ん　風
本纖千ろうる赤砂地の露　青
香気やこに薬さて庭の月　風
かし〜さ雲ら本言山の秋　青
味噌すこしきひしき豚の谷傳ひ　風
三手せんの瀬よしや浦り出　青
つるし物干大名の門や火吹竹　風
みす子和尚のとゆしの竹　ゝ
花くもりみ五ヶ所より出されて　青
寺の里橋柳し在の春　風

三

薦ふや縫立つ胸干流すらむ　東
羽箒と従ハ風をうけるし　風
蜜らうまがしそうて竹の波　東
夕日ハ江湖きく袖陰し波かゝる　風
小法利の吊をほりと云や袖ほふ　東
いろ又ハぬ松を筆ともし火　風
でハうて御身の足半生の谷　東
雑秘の桶は加ゝるもしさハ　風
上方のかさ紀えぬぬ使さて　東
其まもと御はれ加まをさし桾　風
豫竹や二段又くるる哉のれ　東
若もの川ちや干もやさ見まん　風

先棹のよこの小橋を引のかり　東
三ノ
一汗かくのもす谷川の月　ヽ
手拭の雫干浪やよしまふん　風
六祇罷障うるくさの渋　東
ところ汁生死の海をたゞくさう　風
あるさ小嵜しみハ堂両国らん　東
開闢の天地既々大禍仕　風
岩戸午かくし多子行蛙　東
つくのるん鬼の月のけの袖捻　風
松まひの煙りそく八筆魚　東
菜刀の気ずうしみハ魚ままま　風
比處あやお植のつゆ　東

夜ゝ濤はこし稲の白　風
陣より八営大業の灰　青
花や紫の那をしも物とや　風
萬氣一掃に行はれし蔵名　い
名
古郷へハ識付ぬや帰られん　青
草の香を思ふ獅子舞　風
浦の春うかうかと風吹かれけり　青
義経見すく雲のはなつき　風
玉子酒ちら見て次戸をあつかし　青
冷も背しぬ大根の家と　風
病者抄萬に住吉のまつ繪て　青
新ちらすしむ松の芦田跡　風

杓底より有ても井に沈みて　青
乙女のまつさ白儒子の筆　風
呉服物後家漆代のもの通ひ　青
石山寺に詣るうちしき　風
何も尊き法お燗稲荷　青
是彼岸の浪花のあるみ　風
十ミ
六度まて渡りつる橋こえて　青
よし名なし　法横　千万　風
蒼キ名れや　法横　蒼キ名れや　い
きとし　蒼れし　杵の名れ　青
新ちくけ茶よし茅をおるこて　い
一かけいそく共待きくし　風

おもくさ薪をせは花はし　青
ゑやうのくるり山里の春　風

次韻　表題　天和元年辛酉

晋ノ伯倫傳ニ酒徳頌ヲ楽天纉ニ之ス
酒功讃ヲ青追テ之ヲ續ニ信徳カ七百
五十韻ニ
二百五十句
三
又このさわきの春もゆく〳〵
[illegible]のゆし緋子牌去く饒てへて
桃青

這句以テ荘子ヲ可シ見ツ矣　其角
骸骨の力たとしを乗まくに　才麿
きつくしく風み松千秋のしき　揚水
皆千歳くいとまを待る侍さきは　角
猫心くろしき後しきん月　青
激雨ゆく庵の山の木戸より　水
栗も秤さく泰くしの宗り　麿
像すしめ画眉を家子味きこん　青
荒むなり累つれしまして　角
本のつしれ乞食子将の六を子　麿
気相を尺しる霧の萩つきり　水
憎きくしく逃吴をと無上へまも　角

すゝみつゝ人にかへつて引つけ　青
（三ヶ）武士は又をつきをわすれてる　水
女はふくつくやおもしいさむ　麿
さりとては隣の恋をきく恨く　言
うらみ猫の月を嘗けり　角
家にて宿の出ッ鳥ッ別れし忘　麿
乳母しの穀の傍ら萵の蝶　水
去秋を花し食ふれいはゝ宗　青
白魚をかきよする餅器の家　角
実すみわほん仙仏会を行ふ　水
隊士提灯を枕して鉄を　麿
くだかるゝ女房の哥文て　青

無拠は霜もしや見ゆらん　角
まみれおしむくろは越させまじく　麿
因獄の西をまのくらハしむ　水
（名）天帝は国安をさへおしなけ　角
雨の揺子風のかすみにゆきこのは　青
桂を堀ッて星綴をうゆ　水
秋におもしろ布雷の訳　麿
白き歎仁紅葉村に遊んで嬉　青
隠に火影鉋もて斬る　角
師魚は諌め鰻ハ脇を割かれる　麿
安房の岬に浮人なきを佗　水
向陽もしり住ちれ嘯ふ隣を　角

柏木ニ初音が魂鳥の魄　青
恋人は袂に似たるかりゑ哉　水
寄るとくゝる夜ゝ風の妻　麿
夕暮を見て物うきを吐すむ　青
民屋ゆりき腹をせくらむ　角
咲ひの木炭る竿は吃八畦く　麿
まさ柴わくる波ゝの古茫　水
月見をひて旅らる向嬉しくて　角
あくるれともえし神とる様すのう　青
秋夏し小袖よ何とすの空ぬ　水
鈴振ておくりすとしむ神とろく　麿
花は無甲ヵハラ神ハコ宮は蓍持あり　青

郭公衆作る銭のゝる　角

同

たそかれは五文字をうらふ　其角
裏門より絹院をくゝる月　才麿
すこし此秋と泉とや宿覚て　揚水
月をまつにはゝる鳥帽子をかぶるも　桃青
海より陶をおりかけしや　麿
松ほとさする川そひ竿は紫を志こむ　角
ゆやし山深す跡としきるる　青
夕立の岸を吹ゟから風来て
荻盗む松風の音を聞す　水

ウ

雨の窓すけて敵を許さる　角

菊慕ふ宗は庭枝打戸　麿

とひ寄り仁上手より声を聞きて　水

たきしめて香をも愁しく　青

寝覚の後て香の幔子招涼湯もる　麿

はりし八幡の帳の錦宝　角

女の顔陶をも足して泣濃く　青

若宗年のしてやつれ洞て　水

ストヒト茶入花しては八路の年らしき　角

取次へ来り極買つのよらる月　麿

秋の末ゆうる峠限捗ゆきに侍りて　水

蕉の院に沙漢をしる　青

鬼餓食人は花に隠るめり　麿

子ヲ国の寿を寛に惜けて　角

二

渾沌想筆に京にて筆を遊子　青

翁呼べしる私下庫しの山　水

雲水の女房ト繧の下に浮めり　角

よりし京君を嵌めゐいさ京に　麿

棒軍剸中川祷きとをすつて　水

清水向にみすけより静に猿ひく　青

宗のかたをも風吹の玉にやすらずして　麿

唐詞来の客葡萄国に生る　角

松に捨て琴を彈じ瞬廣廣遊詞瞬に辞婦　青

詠めしと蓑て風とやつて吹　水

秋の色ともしく翁覚ゆるは八　角
帷幄かうさく耳は緩立　唐
身の秋ことしみえこへ此且夕さ　水
露ゝ手まつむ妹か蓑婆　青
まのいつゝ綾千鳥の孫の人しよ　唐
綾と酒まつ此典窟さ活　角
小袖のます本枕に事さまゝ紀て　青
納戸の神をも肩し来る　水
媒掃之禮ニ用ニ於鯨之脯　角
庭いの翁蘆原にうつり入　唐
風いく生きく物やあれるに　水
蒹葭手一ふみ枯条をたく　青

探しとし白骨の孩嬰伏て存る　唐
菊の花利剤給をよむ年歳長し　角
縁小倚豆鼓手肴の詩を剥む　青
霜鬢伊子芭蕉手しまき風　水
花のこ鈎狩手羊を直きるし　角
椽手家雑をつゝまうゐ妻　唐
ふ甘すいをまハ吉手の雲をし掃　水
箕さしてゑて窓く庭とうらん　青
本のうし此かうしの枝子芸果千七九　唐
山寺路を抱てうちを乃り　角
見いふす人ハ紙嚢うしめきし　青
木梯のまれしをて木爪の唇　水

珊瑚す鬼灯の鉄説迷しさる　角
踊衣に狂ひする浪　唐
海の月沙伽坊主の夕茶了　水
古茶手うしやる夏の泉水　青
河骨花捧ぐ汲れ蒸をさやつれ　唐
汲むるすゑふて蛇穴と化　角
葉地汲る根の底ゟ主引とめ　青
天火之闇の金銀の箒　水
三ゝ
秋江の残ぶ岸ぶハ走る浪ゟ　角
青海苔らい竭騎をゟ　唐
花の道猿芝手鞭酒を賞す　水
有手秋とふ束金の倚　青

きひしさ浅茅麦藁干す豆続　唐
夕ゟ深かく負ひしけり　角
桃の木手蝶停すゐハおゟ眉之　青
秋の清気も夢牧くむ　水
翁の多をほと粉色すき炙る鳥　角
魚雲仏を以すきし予る　唐
影つゝと踊り挫くの丸てハ念母屋　水
泥材清く雨の火ましし　青
字の花く下妻ゝ家すきくのより　唐
秋の里ひ足理しら踊　角
名
配不人芦の小昆布を干るゑて　青
汲ゝ多ゝれ蘭幸蝶を枕と　水

花やかに鯛すりすり生る小舟　角
すかし尾花を出し山吹　麿
表具は豊の光りを覚ゆ　水
勅使芦原の夢の賀　嘉
秋を喰ふ鶉の音をたてゝきし　麿
なやきのかれ作りてきりさかす　角
律の音は牛田の森の秋月夜　[illegible]
花されしけり乞食壽す　水
雲ひくく足洩く里は衛所り　角
寺しての納豆の都はし経　麿
よそのむしゆ糝花て田の先を泣　水
出炭若々て小雨にぬれし　嘉

膳をさし役ふ親の清めを繁とさハ　角
花なみにかゝ幾年牛逆しに添　麿
竹の戸を入る川に女の霜とほれて　水
ちそ孫すらしみてくくよ　嘉
残のみすれんしとやれハ　麿
事とをさくらちまうちは埋木　角
寿侍ひて寸龍をさしの浮すと　嘉
如泉法師ら東力砂　水

同　才麿
出ありさ泉を八秋の浪に似　株
縫をく月夜に萩を買　楊水

はなさくも茄子ハ菊に未枯て　桃青
鮎さびすより生海鼠剥く　其角
雪の寒みぞれの寒しさむくハ　水
蘿蔭の庵に題を設る　麿
未やつこかられて風流抹と呼　角
桜に雨折れも見えてはふきし　青
ウ
嫦娥しきや女房のせめく泣待を　麿
魚洗ひれる米に碍てり　水
まゐてく杜の戸板をとらせ放す　青
杭ゆく屍に子うらむ水　角
狭郷の修きむ麼ハ蓮して　水
卒都婆の男御のうし洞きる　麿

骨刀かへりけ昔の夕ろきし　角
痩さるわらの親にたびつ　青
胸に病てしらろふきの霧根　麿
米らく音は耳に零けき　水
ささまもかびて笑子わらく秋もそ　青
昔讃居士とて翁子そのをハ月　角
草耕すま穂の生ずらむつけて　水
二
墓暮る仕ならぬれ涙しむ　麿
后宮の藪入なすやら舞る　角
新しや上は時のそぶのさ戸　青
陸中につかに桃で柳の雲補の恩ふる　麿
提灯きつさ霜の一つけろひ　水

日維書店寄贈書

風毒の角内くゐを怪りける　青
入ルの山ふみ狼ゆのゆり　角
雷の斧丁々として青史ゆり　水
言く又言し読陀の玉　鷹
俗のふ麻島の海衣なや　青
郭のふ吾杂妹杂憐ぶ　角
何を覚て踏の霜さ室尺るる　水
ひそのしと雨籠をもゆ　鷹
有と蘭夕芋の葉北行新端　青
粟ありて幾て蓮子千つる　角
二ノ
葵錦の珊の山の皺ゆくしと　水
兎汲起ろく幕しきめく影　鷹

釜ふぶる人ハ志のひてふるあり　角
槌をあてゝだく竹の末　青
古家の浸あり闇きく日経ハ　鷹
いちの涙ひく風の枕ふ涼　水
麻の葉干せる小餅をおまとさ　青
あち枝さすあり生の御柚子　角
きられくて清水味とすむ有ま　水
ゆるく霜葉をちり海まあ　鷹
居ての食ろく浸し比久ささ　青
人死を待て生るなれなし　角
石日花のめそくく咲けりく　鷹
木ありあて風を青　柳　水

三 此両吟ノ説ハ竄ニ出シキツ　素
頭アル／進ミサル餅キラクシ　角
大根の葉越の関のこゑさうう　水
雲のかゝる館に文付こやる　麿
おとろくや火桶の姫の縁の家　角
うつろひし床に薄衣引つゝ　素
立やしと宿入るもとくにとゞき　麿
通ふ首の浮きたてすむ　水
やむひしれ恨ら草のめりけ塚　素
横雲おこし今鳴りし着く　角
こゑも有る杉風とかし三味線を　水
優しーやすしき浮とほまつの　麿

秋の露後の筆をもて後ハ　角
信ずゆるしてゆるゝ紫ハ戸　素
三 焚しろく雲出き松ひしう　麿
体きちうしき御苔の青く衣　水
意崎の松ゝ娘は花の茎　素
老う書う跡る雪の仲神　角
トゆし濃み葛れ走りしき　水
坊の筆立て草は折ひ　麿
無除ゆ皇居子信の残惜鶏ル　角
清くゆの目去きコネル　素
川も茶汲味方の替きてくれ　麿
志尼断は叙切りなり　水

衣饐る袴をとりてつの川して　青
お墨付廉に紙引て入　角
松茸を売し翁ハ枯にけり　水
栗の梢にしぐれのいづ　麿
名
饑寒に蚕の言をしおもふなる　青
足袋さゝず窓に風鈴を出り　角
扇折女ハ夜々に枕しり見て　麿
丈八江戸に恋よまれ候　水
むさし一ッおさまりのとも続てやみて　青
乾する茸のみ宮も焼えて　角
社々に来て上る浄る踊て　水
法賦の書し武者絵しけれ　麿

書遣る方の頭の名のつゞきて　角
熨斗を持人銚子折すけ　青
呼しも娘閻魔かくるめハ枯跡　麿
夜園に多くハ茶腥し　水
風の月熱の湯霊を結ぬける　青
舞ふる小僧所ほやしさりの露　角
十
山径をさいそらの道を直さされ　水
笛の枝折を待てもてる　麿
尾花の梅を深くとめておかしき　青
金をとうえて擬し人の助けなる　角
血をも染て風吉刀を折とる蹴（ヒト）　水
古皆を取て初春の枕す　麿

ちる音は雨か夜寒のきそもしろ　角

猿ハ酔て酴醾に入ル　素

同　餞無

附贅ひとつ河豚にまさりし日の春　楊水

冬用の枝をさし出す茶　桃青

旅ル鳥が身を渡す花の隙なき　其角

春雨の里の四出あとを隠るゝ　才丸

天和二壬戌春

弥生には鳥も百つし　欒樹

さ花佗しくて二月山の花　千春

風なき夜さは絃の絶をやくるけて　卜尺

雷をわすれてみる　暁雲

宵よりの盃の陣を退りける　其角

さんしよの葉の月を汲　芭蕉

雲のうへや湯やの詩を画かす　素堂

梓桐の夕霧を抱いて　似春

孤村をのこす風の丈を根むすと　昨雲

燗酒樽に吹くをすむる　言水

めうしも八山崎小路寺　執筆

影たれ塚を四向して　樹

納桶にまゐらぬ草花折れ折　子

小海老爪白母を子くさむ　尺

悴てる海の鼻をも見やりて　暁
蒋枕の精一の吹くうたてり　臺
行脚坊卒都婆を寛の笠秋　蕪
八幡の月に笑や輝く　角
味噌桶に魚をる家の戸ハ　宮
治る神のうく萩の小女　眠
贏てる花副駒の尻入ふ家　似
二 拵枝に地をもちろる妻　子
切岸の形をさしてゆるふと　瑚
跣鳶に見て佛界に飛　暁
寒の代ハ隣の町と戦ひし　角
羽る物寄く五出於て一楼　並

茶湯くる嶋の古風に陽気し　臺
旅の夜に盗手血をかくむらん　宮
板に鮮蟻の漏より振てて　尺
槐のうくるまし茂り尺し米や　似
白菊の香に酒を買とて　並
孫盗妻を百をひそめく　眠
嵐定後ヘ天つうよる夜凄く　子
遥の槌に餅菊ひける　瑚
末の五鬼夜中ニ帯てタ月秋　暁
猫にてしく菊の茎ハし　臺
二 河さこの浦に扇まつ名し亀姫　宮
菊さくの叟　ま哉をあ手見る　並

此宿は鯨波のかけ浮寝や
紀の舟伊勢の舟尾張船
波八白浪きしみにも又ねうし
契情千鳥見そこなひけり
今宵手忘夜は掌を重ぬらん
柳の枝に水うつりける
庵縫荷緞子かられ下戻る
いそぬ役者に藝装加はれ悦
其さくら院千日行を僕まれ
おもみのかみ樽肉まをまん戸え
然ぬ鰯を花千折しきさ
当染のみ葉しし襟の為

似　樹　堂　曉　角　吹　尺　手　並　書　守　角

三
玄宗ロシの月のさやけき有乏し
まこもの風に年を杖つく
山々しみち千羽ぬけ子や旦ぬらん
敵の翁衣似けりし　佛
寓居入王荘の風雲の洞
寺を家新しつゝ不二の棟上
松坂の組父黄いろ出るさ
珠ま十重の密柑熟スル
蔵下千火燃て館空きになり
旅小力の吼ぬけてり
壺粧古や世粧の松千花を折て
かりすの衣提千しらし

曉　尺　手　似　明　並　樹　嵐葉　岐水　曉　角　堂

揚上れ宿たハ接くもろくみまる　景

西瓜ハしられ消満る也　子

寄くくる志られ角豆の散　暁

月ハ薬師の古寺やとは　樹

道芝のよこそ夢子を秋出尺て　蕪

つき二寺耳ふ請るよし京　峡

歩ナおとまうつらん枝落　角

百姓の家ヨ入て後切　景

見此寺先祖の榾の火の消ぬ　明

袖をうらし米ヰ生ヽ菌　子

雨とゆのく旅いの村ヰ聞る　帯

羽尾小楮の夢ヰ荒果る　暁

宿紫など見え物やう紅葉　樹

春ふりき菜や花の端つるき　角

清涼庵後の泊り志けし　峡

蓮りふりふの夏引の巣　明

名張寉のそしてわろきき　樹

覚しき情人　秋の埠　景

月ハ間つ山寺ともを鱗　角

石凡その松ハ岩のりそろ　帯

常木の茂さハ限り手をとろ　子

ふちとのげ金色の玉　峡

袖ヰ入蠕嘉とをりまん　蕪

涙の玉はりゆるをりかくのす　樹

我つまり泣たる胸の中道して　吟
闇迎ひ遣る町子踊りて　角
肩に縮く短冊もちれそ踊く　暁
奥まくの法越勝れ塀定　嵐
篝火を刀手かけるきのふ山　千
浪ハ井積ゝかくしより蓑人　峡
物洗ふ盥をふたくなうにけに　瑚
麓つく白れごほうし…　暁
市総の本町をみて木綿ハ　葉
日傘さまする姫と男と　吟
言葉まて外手を直けめれ　壺
枝ともしも思ふ袋桃灯

花の形ぞ塗人形手に渡りぞ　嵐
八重し霞ふれ小にて物　角

元和年中

世の中きる伊賀の山越家の生　松風
身八ちるもしらずかすむ武蔵野　芭蕉
店賃の高かさ拵に来の床に　風
よしやかくかやする筆の手まね　ゝ
炭の船されて居捨の月春し　ゝ
終そ末以降八八百七百
ウ
霜しるしき僧の病す所笑て
きのふれ海をそ付住くさく

濡雲かきくもる給ふ衣和帳
歎仁以来の山おろしの浴
吉野の松八ちひらる境
朱[illegible]世雨降ゆく枕
探幽か道は[illegible]踏る月
京[illegible]し酔る秋の露
仏[illegible]大[illegible]し乗[illegible]秋の風
すらひを宿手[illegible]枕の露
一生[illegible]起る窓の[illegible]香思ひ
二 若[illegible]の[illegible]して豆
張め[illegible]秋の床乙[illegible]して
ふのりを[illegible]し[illegible]ふれ

お[illegible]子[illegible]をつむ綿のきれ
源をま[illegible]宝の山も
萩[illegible]心の中[illegible]る
まさ[illegible]所[illegible]岸のし[illegible]
又ひ[illegible]つ[illegible]以て進む清[illegible]我[illegible]
いつ[illegible]浪之尾[illegible]
宵[illegible]秋[illegible]月[illegible]旅衣
三里[illegible]此[illegible]新[illegible]方
追剥[illegible]旅の露
[illegible]け[illegible]流[illegible]力風の米
二 吉野の秋[illegible]る[illegible]晴て
雨や[illegible]隊てゆく[illegible]ん

消跡子柳の幕の夕かのけ
火纜の汁しの一二寸ほと
紛まのゝ後め拵する花の江
江戸千々上津風すゝの香

同

ふ宿の金汁香を絡たる比の如
麦手ぬくし微潤む微
筏の朱千運漉行み忝徴て
法羨は斜絶たしさの黄角
面後乃織の鏡なくらへてま
さゝらハ二十八針まん

芭蕉
麋塒
一晶

ウ
きさらぎや武者物縫ふ上
後家御矣帝の翠篭に飛かくれ
かくれくも旅人ハかし矢背の里
東さまてのすり門たくぎぬと
幻る雪待をと買ふ来る人あらん
一経の綿千江の燒軽舟
下着さ惜しとる船千ゝり
其る風接ム几倫乃宮
少ワ子の籍電六も消四首
蛛萩米也もうみな無葉
花僧さて楼ハ郷千立つき以て
董尾ハ風み継々と云へまも

二
陽炎の具足陀佛か何の大工
蝶ハ涙口百年の楽
夕顔の花ちる宅を老の袖を引
桜のうち坂は清まちれ
無ハ家を押を打ちけ墨す拾
餅をおもへる大寺の僧
長安ある乞食ハ家の栄竹
千家をふとる牛菜の叢
崩ゆる頭ハ又ちれ媚をこう
古佛の腹に夜露をし月
雨をしられ蕉山伏の袖ぬれて
僧白雲の居ここう

二
ちきりやる牡丹ハ宜の加賀の大千
白袋袖躍はや免野路
来は免る乞鏑まちの雨路れ
夕顔長若且すいらん
丸ッ針鼎ハ赤ゑ花を煉
序を出路の露の文橋

麋塒

同
故針垣穂ハ木瓜も黄葉にて
筐むかしの家の霧むかし雨
哉ほりよ背に櫻を拂らん
市に小家を蕗ふ新月

一晶
芭蕉
塒

良宵の席ハ小袖を打かけて
紅白の蘭風に花を操
影ある卯塔雨の音をとゞろく
金人ハ椽をうちて此賤る
指ち此夏炎ハ湯籠にとゞめて
上等の品といふも三線
こそ玉の裸を錦に彩り
窓丈恥よいのちつれなく
影の住の乙めより起まて
こゝしと契りし葛の川ぞ
母の歎きはかなく肩を貫けを
うき成さくてぬ身をもへ寄て

晶並瑚晶並瑚晶並瑚晶並瑚

道行来の路芸花を探くすら
梢咲清き錦ひれ
春風の池に鏡をかりもちて
かしすハ縁を告るふくな
院の内に餅米荊ん男を逢て
青嵐凛然たつ月識する
風の縞檻の青きや招きれん
肉野をたかる花行の色
新しき塚ゆきしとこ呼けるし
虎を浅射臣に向き矢を
千金をいやしく賞玉を實す
飛燕も指れハ渦くらしや

晶並瑚晶並瑚晶並瑚晶並瑚

よし原の三千年を老の九十九髪　晶
堂のむしろに念佛をきく　蕪
二ノ　蓮生か火を消狐来りけり　湖
猟頭弓を筆より献　晶
烏帽子れ舞ホ手姫を買ひて　蕪
枝に巣をもる燭燈の千代　湖
俳諧の雲の花の浮狂人　晶
る蹄に讃おくる春風　蕪

天和三癸亥年

花にうき世我酒白く食黒し　芭蕉
眠りを盡す陽炎の痩　一晶

郭ゆりて書ふみを味ふらん　嵐雪
幸子給ひし手折れ處桜　其角
月を濁す汁の蕨を芦ノすりて　嵐景
浪のさし枕にあふこ鶏新　枳風
ウ　鬢髭淺ふ雨よし翁み姑雨よし　晶
朝にきほしをふる手紙宕　蕉
浪人の京するを語り思ふ石　雪
やふの一枚手入れうひそよむ　景
美濃横同し宗音を響ひかう　角
秀八退之が解硯を尋つ　晶
霜月の神まつ嘴を明あらん　蕉
汐照海に松魚厚漆　雪

黄情の膿を採し祭代より　晶
陶織に角を一つくりに(?)蒸旋　角
作し澄の椿をむさく学の月　葉
破笠堤ひさく詩の上をと次　雪
二
動解に弱瓜を賭くるもし　蕉
つくしきめぐりの松崩に積　晶
矢つくつる搦みしめ豊底　雪
是は私ゑきさつき後のむ　葉
粧入ぬ銀は六十の荊なれ　角
浮前に放つくるく東し　蕉
人の情貴精長の宵の蘭子達く　晶
松たくさゐもむ雲の作けあれ　雪

きくかしや陣中に似をしやうく　角
市野に紙く餅を貪る　葉
姿舟の月に御衷く足洗ふ　蕉
木賊は武士の横鉢　角
二
天くすしき艶書を焼や紫枕　葉
家ひさんやよ陶の坏しは　品
暁の霜ををも毎に覚されて　雪
猿に焚ん茄子すかくらう　角
茶に栖鹿山の列をそちるて　蕉
梢にまねく瀑布を酒飲　葉

同

酒債尋常住處在
人生七十古来稀

詩あきんど年を貪る酒債哉　其角
冬-湖日暮て駕レ馬ニ鯉　芭蕉
干鈍き夷に関をゆるしけむ　ゝ
三線人の鬼を泣しむ　角
月ハ袖こほろき睡る膝の上ニ　ゝ
鴫の羽をしける萩深し　蕉
恥ウしらぬ僧を笑ふか艸芝　ゝ
時雨山さへ紀かうのまと菰　角
海竹のとてうを茨渡して　蕉
物嗅のやかて居席を蕪　角

一の蛇黒の夜あかす龍　蕉
斬名をも川の宝髭を責て　角
はぐらきは怒の雲に峰立て　蕉
浮世せんのめむら食の疲　角
嵩花質むしと笠ハきんと俵　蕉
芭蕉けふけの膝たてる足下　角
腐れしる佃佐犬も呼んや　蕉
餓ゑとしては宿ぬ夜私ぬ月　角
ニ篝入の名付ましてから堪　ゝ
かくの山出て蔦くしみあし　蕉
嘲リ二黄金ハ鋳ル二小蕊　角
是餡くるしおもきめり乱　蕉

枯藻髪栄螺の角をまきれけん　角
魔神を使トス荒海の末　芭
鐵の弓取たけき世ニ出よ　角
虎懐ニ妊ム物のつき　芭
山寒く四睡の床を吹あらし　角
埋火消て指のともし火　芭
下司后朝をねたみ月を閉　角
西瓜を綾ニつゝむ初霜　ゝ
二
哀いの王宝珠卅のぼさ吹消しん　芭
みちのくの夷しらぬ石向　角
武士の鎧の丸寝枕ニす　芭
八声の駒の雪を告つゝ　角

詩あきんど花を貪ル酒債哉　芭
春湖日暮て駕レ興ニ吟　角

同

一年三百六十日　李下
海口吹葉ニ三は一
駝やく寒やゝし向け書きし
安えまし浪ニ大根こく舟　丈角
月影を芋の滴や枯つらん
くわうきえて声をよみ咲其　下
百とせの旅と秋をかくさえし　ゝ
傾婦を業の蝶ニくらす　角

ウ敵ゆる浪のきしそぬれ竹　六
忠ハ下に一番の敵　角
文字れ金銭ハあきもつて呪ル　六
哀とり腕をうち善ふ　角
世渋を志のハ隠とぞかひ登き　六
士峰しの雪を空むか賀成　角
松戸て千年字実の読まう　六
名をもらふかさし黒木律梓　角
経若の花尺つ男内ゆのし　六
まろし雨男とたつゆひのふむ　角
月手帰り生憎のまれ上たや　六
芒もたちくあふざ薪論　角

二新の洋も花寄は経を検まん　角
院の法家の何しらふむ扇　六
哀をむ角京小形を思ひなる　角
仕様ともとまハ宗のとらび文　六
墨染手安房守を新むれ　角
雨みふれかもし地とまう　六
筒よる猿骨何をせ世情　角
風まゝよ夕ゆ気嫌の能　六
酸もしふ冷茶ハ秋のむくのまえ　角
こぬ萩の格子隣を慄む　六
冬月の盆ハ流すくまりつ　角
金襷往手粕のみを抛まふ　六

二ノ紫生ゑめを安行ぬ堅にさきん　可

すり鉢にふる岩ま事れ雪　角

寸法河切の衣北肝しのが小　芭蕉

昔をも力む卒都婆大小　可

伊の為門を尺とよ花の色　角

凡丈三百人の春の雨　、

寛文十戌年

天と陰もささ乱之肌を隠ると衣　助勝

夜走り可浮千ゆるり風民　正敦

かけ作り洒京柏まもし汇欠渡り　宗房

同

抜ハ露の玉藪右刀子一葉切　長忠

さみ川夫の根すりつよみ秋風　定親

冷しき石ハさまつ虎子似るを　宗房

同七未年　一句附

肩子気物にうまのつハ鉄和

くをたりけと河川おなの家　宗房

保生猴のひとみきめつ汲のさ

志やうのの輪河ろし雪まのつを刀　訪

跡ゟ扇をさしさつくしれ
神さまみへそうろる海をかさん　訪

延宝六戊午

大坂屋の鵜もとめに不二の嶽
故手さゝれ舟田子の浦かな　桃青

虫の聲白髪とけゝハあはれ
庭の井ごの寶生ゟ花
孔子ハ鯉魚のさしみ好てられ
前起する豪古の垣手为更て

説経芝居ろうろ帰りし
萩すゝきさ河刈萱しやし
挽ゟ菊を鬼の餌食の生肴
菊やや海楞醤油未透
談梅手大道熟の昔を変る
仁義芸藤手植をもそる
捨柳のおりことかふ山見して
大宝の浦至和差家と妙絶

雉のこゝろ集めや入ぬらん

大津京良庭よ京この御好

武者ぶるひを付つくろひてよれしと

敵手うしろを見せる尾つき

桶ひと川物の元をとゞめぬなら

なされ人写されぬめのみての虫

子のまうら家此秋なりけり

底網ちハ江戸の海浪

まつゝるを見れハ嫁しそ紫氷

汁之まで家をもちんとゝ

ふき寄既に所にわかに財ハ

御布をときゝをする猶金の山

此川より素業洗ふの末

此界をひろふて大将鉢

本持ちたしよみの海浪

絲續笑んよま業ゝるのうち玉金

上ハ船さし中ハ竹篙
夜もしに銚子ねとしの鐘覚え
四季かくる長楼も分き
送り猪花ゆしき魚るる小
崑の鶴毛ひし海手沈めり花
女院詠のれ二位の尼館
大阪の退屈らず取染する
嗅覚の七つきし稲葉山

霞以ちのうつくへの若のの書
みの笠小槌ゆうら玉のちい
手響手丑日の兩と流もし
背萬のうつる刹力をとぐ
跡手よう侭をらひすは霧
見も又らぞそく優婆夷は入娃
帰覚らひしき浮庵の舟
若桃もと本被ひとんかとるて

あらむれハ松浦と申五郎兵衛附
大や舟子のみしる京橋　ゝ

天和年中
伊賀御集物
栗呼子山寺余騒ゝ秋ゝ落花　青府
自乳師走ニ嵐一尺の松　一示
伊寺庵の河霧ハ坂をゆのむらん　桃青

天和四甲子
芭蕉翁秀句之日よし
月と蕨を酒の乞食　李下
芭蕉

枯枝に鴉のとまりたるや秋の暮　芭蕉
鍬かたけゆく霧の遠里　素堂